重監房資料館資料館だより

JYU-KANBO National Museum

くりう

2023.3 No.22

目次

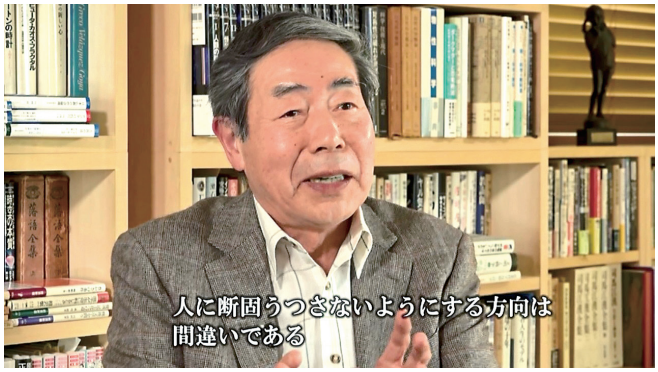
P1-P2　報告　DVD「仙太郎おじさん！貴方は確かにそこにいた～蘇るハンセン病患者と家族～」
DVD「無らい県運動をたどる－ハンセン病患者強制収容の実態－」が完成しました。
P2-P3　資料整理作業の報告―作業の過程でみつかった喜平の手紙―
P4　2022年度　来館者統計
P4　お客様の声（来館者アンケートより抜粋）
P4　お知らせ
P4　ご利用案内・アクセス

報告　DVD「仙太郎おじさん！貴方は確かにそこにいた　～蘇るハンセン病患者と家族～」DVD「無らい県運動をたどる　－ハンセン病患者強制収容の実態－」が完成しました。

重監房資料館は、開館以来、「特別病室」（通称：重監房）における悲惨な人権侵害の実態を後世に伝えることを通して、ハンセン病元患者・回復者の名誉回復を行い、ハンセン病問題の解消を目指す、普及啓発の拠点（ハンセン病問題基本法第18条：「国立のハンセン病資料館」）の一つとして活動を行ってきました。

2019年６月28日、「ハンセン病家族訴訟」の判決が下り、控訴期限の7月12日には首相の政治決断により、国の責任で、元患者・回復者のみならず、遺族・家族への救済も行われることになりました。基本法も名誉回復の対象に元患者・回復者の家族・遺族を加えた条文へと改められました。ちょうどその頃、患者遺族の協力を得た私たちの開館5周年記念のドキュメンタリー映像『遺族ふたり』（「知られてはならない秘密」「仙太郎おじさん！貴方は確かにそこにいた」）の編集が大詰めを迎えていました。

家族訴訟という時宜を得て完成した『遺族ふたり』の上映会を、新型コロナウィルス感染症の感染拡大の渦中でも行ったところ、作品の評判は口コミで伝わり、現在では、DVD貸出にとどまらず、作品解説を伴う講演会にも招聘されるようになりました。私たちは、その後も『遺族ふたり』のアップデートを目指して積み残した課題やさらに深く追求できるテーマについての調査研究を進めてきましたが、Office MOTO（岩波映像）の映像製作協力を得て、この度「学芸員リポート2.5 仙太郎おじさん！」増補版、「学芸員リポート3　無らい県運動をたどる」の２本が完成しましたので、ご報告いたします。



［出演：池内了先生］

「仙太郎おじさん！」増補版

［発見された仙太郎さんの写真を家族に見せる。］

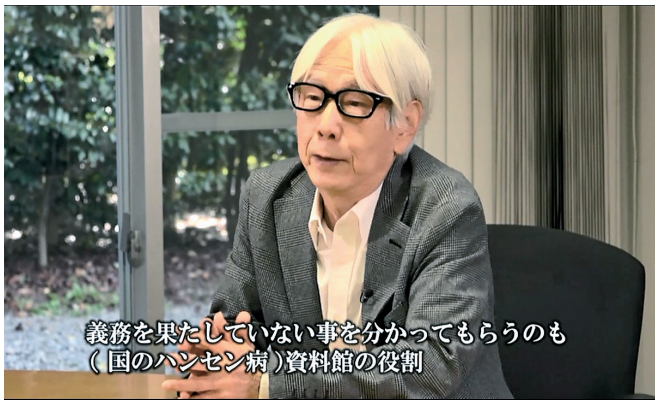
旧版「学芸員リポート2」では、遺族・木村真三さんが、一枚の葉書の記憶を頼りにハンセン病患者と目される大伯父仙太郎さんを探し、長島愛生園での在園をつきとめ、遺骨を実家のお墓に納めるまでを映像化しましたが、究明すべき課題が残されていました。仙太郎さんは、昭和14年９月27日に長島愛生園に収容されて、昭和16年７月12日に亡くなったのですが、在園中の仙太郎さんの足跡は未調査のままでした。そこで再び木村真三さんと長島愛生園の協力を得てミッシ

ングピースを埋めることにしました。まず遺族である木村さんのみに許される仙太郎さんの存在記録の開示請求を行ってもらいました。その過程で、解剖録が発見されるという幸運が重なると、医学者である木村さんの真骨頂が発揮されます。獨協医科大学の同僚の協力を仰ぎ、古いドイツ語と日本語の仮名交じりで書かれた仙太郎さんの診察録や解剖録の解読を行い、さらには木村さんの強い希望で愛生園歴史館での展示会の開催も実現しました。2年間の空白を埋めたファミリーヒストリーの完結に留まらず、仙太郎さんの姿や存在そのものを、遺族である木村真三さんが広く公開することにより、仙太郎さんは失われていた社会との関わりを取り戻しました。副題を「蘇る患者と家族」としたのも、その意義を踏まえたものです。

「無癩県運動をたどる」

［兵頭裕至さんへの聞き取り調査］

『遺族ふたり』に登場したハンセン病患者は、昭和前期の無癩県運動で療養所に強制収容された方でした。旧版での焦点化は必ずしも充分ではなかったのですが、光田健輔の文章には、木村仙太郎さんが生まれ育った愛媛県北宇和郡における長島愛生園への患者の集団収容は、遅くとも昭和８年に始まり、昭和18年には無癩化が達成されたと記されています。そこでの患者収容の様子は、警察、衛生当局、方面委員、学校、青年会、婦人会、隣組などの組織的な協力による「祖国浄化」の模範と光田によって高く評価されました。仙太郎さんが、長島愛生園に集団収容された昭和14年は、まさに無癩県運動のただ中にあり、「仙太郎おじさん！」制作の発端も、木村真三さんが、国立ハンセン病資料館第1展示室の愛媛県「癩患家地図」（昭和12年）の旧好藤村に、仙太郎を暗示する数字「⑤」を発見したことでした。北宇和郡は、当時の患者収容の様子を描いた小川正子の『小島の春』に所収された「土佐の秋」「再び土佐へ」の舞台の隣接地で、地勢的に連続する南予と西土佐のハンセン病患者の集団収容は、「救癩戦士」こと長島愛生園の医官・書記官の主導で行われました。『小島の春』の描写を参考に、土地勘のある木村真三さんの協力を得て、昭和前期の南予・西土佐地域の無癩県運動の事跡と記憶をたどる実地調査を映像化しました。



［出演：内田博文館長］

無癩県運動と『遺族ふたり』プロジェクト

ちなみに『遺族ふたり』の「学芸員リポート1　患者の子と呼ばれて」は、本妙寺癩部落役員という理由だけで「特別病室」に収監された中條英一さんとその娘さんにスポットをあてました。無癩県運動のターゲットは、「①放浪・漂泊するような患者」「②いわゆる癩部落に集まっている患者」「③自宅で秘かに療養している患者」に整理できます。①は映画『砂の器』に表現され、②は本妙寺部落に関連した「患者の子と呼ばれて」、そして『小島の春』に描かれた③は「仙太郎おじさん！」に重なります。長島愛生園そして栗生楽泉園も、「祖国浄化」のための無癩県運動の推進の受け皿となりました。重監房資料館の活動の足場となる「特別病室」（重監房）の設置・運用も無癩県運動に密接に関わります。『遺族ふたり』プロジェクトは、無癩県運動を焦点化したことで、より近代日本の国によるハンセン病政策の誤りを学ぶことのできるコンテンツにブラッシュアップできました。今後は戦争遂行のための「健軍県民政策」「優生政策」も意識したいと思います。

2023年度からは、今回紹介したDVDも団体貸出の対象になります。DVDは国立ハンセン病資料館や全国13園の社会交流会館等に配布もいたしますので、機会をとらえてご視聴いただければと思います。ご希望があれば上映会とセットでの映像解説や講演出張も承りますので、映像コンテンツ貸出と併せて重監房資料館までお問い合わせください。

（黒尾　和久）

資料整理作業の報告―作業の過程でみつかった喜平の手紙―

2022年度の企画展『重監房を報道した男～関喜平展』の終了後にお預かりした喜平の資料整理を始めて１年が経ちましたので、記録を兼ねて１年間の作業を報告します。

預かった資料の９割は書籍で、文学の本が多く、日本の古典から外国文学、詩歌、娘に買った児童文学と多岐にわたっています。政治や法律に関する本、吾妻や草津の郷土資料もありました。１点あたりの大きさ・厚さ共にボリュームがあるのが、新聞社発行の『毎日年鑑』『新日本大観』等で、戦時中のものが２点、1950～1964年にかけて23点を数えました。

資料整理の実作業は、本の破損具合を確認しつつ、乾いた布や刷毛で埃やカビをはらいます。蔵書の大部分は屋外の倉庫に置かれていたので、虫の害を含め破損が大きいものがあり、１点１点の状態確認が必要です。昨シーズンの冬期期間は、ほぼこの作業をしていました。初夏に燻蒸処理を専門業者に依頼しました。収集した資料に付いている害虫やカビの胞子など薬剤を使って駆除する作業で、これを行わないと資料を館内に入れられないのです。燻蒸の後、ようやく目録の作成に入りました。目録に資料写真をつけることもありますが、本作業では書籍に関しては撮影は行っていません。目録作りはまだ途中ですが、現時点で273点の入力が終りました。これらの作業している中で見つけた書籍に挟まっていた手紙を紹介します。

この手紙は、折り畳まれて『裁縫新教科書（四）』集成堂1925年発行の最終ページに挟まってました。書籍には喜平の妻の名前が旧姓で書かれていることから女学校で使っていたもののようです。手紙は、便箋ではなく罫線も何もないメモ用紙に書かれています。メモ用紙の右上には２）から５）までの通し番号が振ってあります。残念なことに1）は見つかっていません。喜平の長男・光さんに手紙をご覧いただいところ、「この番号を振るのは喜平のクセなんです」とおっしゃっていたので、署名がない走り書きのメモですが、筆跡を含めて喜平が妻の穆子（よしこ）に宛てたラブレターとみて間違いないでしょう。

この手紙からは、新婚当初の初々しさと穆子に対する気遣いがみられます。喜平は1932（昭和７）年、23歳の時に嘱託の地方新聞記者として独立します。ちょうどその頃、結婚したようです。喜平の結婚に積極的だったのは、母の美代でした。母は、喜平の文章力に期待しつつも性格が優しすぎることを心配して、しっかり者で頭が切れる穆子を嫁に迎え入れたようです。母の美代と嫁の穆子は意気投合したのでしょうか、姑の意を汲んだ穆子は「私が、喜平を一人前の新聞記者にする」と周囲に話していたそうです。

一方で、結婚後の手紙に「貴女の趣味はなんですか　それも何時か聴かせて下さい」と書いている喜平。こののんびりとした感じからも、女性が気丈夫で情に厚く世話好きな家庭を想像できます。農家の長男として生を受けるものの、喜平の将来設計の発想が非常に自由で、いわゆる一般常識に囚われていないことに注目すると風通しの良い家庭なのかと思うのですが、この手紙には「殺風景な家庭です」「家庭的暖かさはありません」「親不孝ではあるが早く中之条へ家を持つ事です」「母は泣き出したい程、つまらない日を繰り返しているでしょう」と書いてありました。現段階では根拠のない想像ですが、父親や祖父との関係が良くなかったのでしょうか。

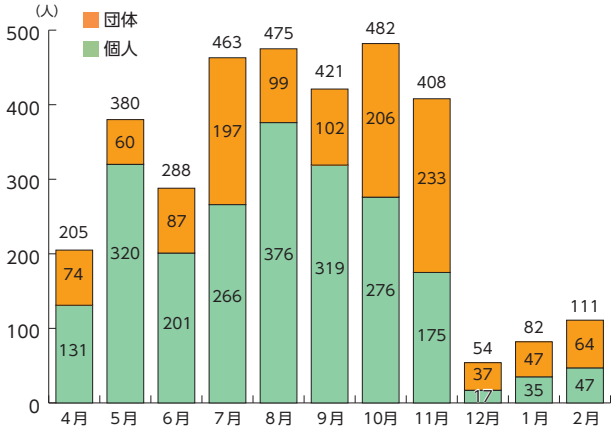
喜平ご子孫から、手紙開示の許可をいただいたので、資料整理の最中、どきまぎして想像を巡らせた一例を紹介しました。将来的には皆さんが喜平について思いを馳せた際に適した資料を提示できるように今後も整理の作業を継続していきます。

なお、喜平の妻・穆子については当館刊行『瀬木悦夫復刻シリーズ２　われとわが身を』の40ページに息子・光さんの話を掲載しております。『瀬木悦夫復刻シリーズ２　われとわが身を』は、『瀬木悦夫復刻シリーズ１　実話小説　特別病室』と同様に、当館にて配布しております。遠方の方には、送料を受取人負担で送付しております。ご興味がございましたら当館までご連絡ください。

（鎌田　麻希）

2022 年度来館者統計

2月28日現在



2022 年度入館者数

延べ	3.369 人
1 日平均	12.2 人
開館以来延べ	46,969 人

ホームページアクセス数

2022 年度	38,029 回
開館以来延べ	404,789 回

お知らせ

■新型コロナウイルス感染拡大防止のための来館者の皆様へのお願い

重監房資料館では新型ウイルス感染防止のために、引き続き、館内の見学者を常時50人までに制限させて頂いております。(4/25(火)までは冬期予約期間のため、個人・団体ともに要予約)　また、例年通り、4/26(水)からは11/14(火)までフルオープン期間となり、個人見学は予約不要、開館時間は 9：30～16：00(最終入館 16：30)とさせて頂きます。ご不明の点は、重監房資料館までお問合せください。

お客様の声（来館者アンケートより抜粋）

◎海外が患者を開放していた時も日本は隔離を推進というより国が主導になって強制しており、明らかに間違った方向に進めた。未来に向けてこんな事がおこらない様に、発信してほしいです。

(群馬県、57 歳・男、公務員)

◎このたびは娘がまだ見学していないので、一緒に来ました。私は 2 回目になります。前回は夏でしたが、今日は紅葉のすてきな秋でした。あらためて差別や偏見のおそろしさを感じました。資料館として、ずっと残してほしいと思いました。

(茨城県、61 歳・女、公務員)

◎時間を過ぎたにもかかわらず、スタッフの方に詳しく丁寧に説明をしていただきました。いまだわからないことが多いということ自体も印象的でした。いまのような時代(コロナや戦争)だからこそ、ハンセン病の歴史を学び直していくことは必要だと感じました。

(京都府、36 歳、大学関係者)

◎無知と偏見の恐ろしさを改めて痛感しました。平和な世の中に生きていることと、人の弱さ、おろかさを次の世代に語りついでいかなければいけませんね。これからもぜひこの資料館の充実と発展（人々に知られていくこと）を望みます。

(群馬県、60 代・女)

◎来て良かったと思います。ハンセン病の患者さんがどのような過去を送り、大変な時代を送られたことを知る大変良い機会になりました。小学生の新聞の 1 面にあり、子供が来たいと言ってきましたが、大変良かったと思います。

(東京都、40 代・女)

ご利用案内・アクセス

■開館時間■ 4/26-11/14 (フルオープン期間)：9：30～16：00
11/15-4/25 (冬期予約期間)：10：00～15：30　(団体、個人とも完全予約制)

■休 館 日■ 毎週月曜日 (祝日の場合は翌日)、国民の祝日の翌日・年末年始・館内整理日

■入 館 料■ 無料

■交通案内■ 鉄道・バス利用の場合　JR 吾妻線長野原草津口駅より草津温泉行バス約 25 分
草津温泉バスターミナル下車　タクシー約 7 分、徒歩約 45 分
車利用の場合　渋川伊香保 IC より約 2 時間 10 分　上田菅平 IC より約 1 時間 50 分
(草津方面からお越しの場合は楽泉園の正門を入らず、その先 200m の未舗装路をお入りください。)

重監房資料館「くりう」第 22 号【季刊】
発行日：2023（令和 5）年 3 月 29 日／企画・編集・発行　重監房資料館／ URL：https://www.nhdm.jp/sjpm/
〒 377-1711　群馬県吾妻郡草津町草津白根 464-1533　TEL：0279-88-1550　FAX：0279-88-1553